

平成 29 年度 保育サポーター研修会

と き 平成 30 年 3 月 11 日（日）10:00～

ところ 山口県医師会 6 階大会議室

〔報告：理事 前川 恭子〕

保育サポーター研修会は、保育サポーターバンクに登録する保育サポーターが、各地域から集まり、交流を兼ねた研修を行う場である。

黒川部会長によるバンクの説明の後、二人の保育サポーターからサポート事例が紹介された。

お一人目は、保育士経験があり、現在お孫さんと同居の方で、オレンジとブルーの補色を鮮やかに配したお召し物であった。お正月にいきなりサポート要請があり対応されなかったこと、おむつを外す年齢を疑問に思うと、娘さんから「時代が違う」と諭されたことを話された。

平日のほとんどをサポートされているお二人目は、黒のトップにシフォンかオーガンジーを思わせる赤のボトムであった。ご本人だけでなく、ご主人・ご両親・叔母さん・娘さんと、ご家族・ご親戚と一緒に保育してくださる。預かるお子さんの母親に、まるで娘のように接していると語られた。

二人の保育サポーターの装いは、続く山縣先生の講演の「美意識」につながるように感じた。

講演『『ワクワクドキドキの子育て論』

～子どもの心と響きあうための関わり方～

岩国短期大学教授 山縣 明人

オンビートの手拍子に始まり、聴衆の歌にギターを合わせながらご自分はハモる。持ち歩く二つの袋には、ホワイトボードのマーカー数種とベルが入っていた。

○響き

二つの小さなチベットシンバルを水平に当て、共鳴させる。響く音は子の心に入り、泣きが止まる。

人と人との関係も同じ。心を開く二人には美しい響きの出会い。片方が閉じていると響きが鈍い。双方が閉じていると響かない。あきらめてぶつかりもせず、無視し合う関係もある。これが親子では悲しい。

○時代の流れ

20 世紀は均一を求められた時代。パターンを認識し、情報を処理し、その中から正解を見つける。



21 世紀は一人ひとりが違う時代。編集する力。アイデアを組み合わせる力。つなげる力。

つながる力が生きる力となる。生き抜く人は本気で遊べる。美しいものを「美しい」と感じる事ができる。

○異文化体験

美しいものに触れ、美意識を養う。感性をみがく。暗黙知の概念を提唱したハンガリーのポラニーは、感性の人である。彼はヒトラーの台頭を予測した。美しいものを知っていると、邪悪なものが見える。

良い教育は良い記憶を作ってあげること。幸せな思い出を作ってあげること。子どものイメージタンクにさまざまな良いイメージを残してあげる。

医師の子息は持ち上げられている。保育サポーターは、それを普通の所に戻してあげられる。子どもにとって、その過程が異文化交流となる。異文化を体験することで美意識をみがくことができる。

おかしいと思えば、親に「おかしい」と伝えてよい。美意識のある人の言葉には腹が立たない。おかしいと思えば、子どもに「私はこう思う」と伝えてよい。子の人格を否定せず、くどくどと叱

らなければよい。おかしいと思うことを我慢してまで行わなくてよい。ただ、親の仕事、医師という職業は素晴らしいと子に伝えてほしい。親が働いていることを肯定してあげてほしい。

○地域の中で

団塊の世代が現役を退いた 2015 年頃から、時代が変わっている。新しい時代では、今までの方法が通用しなくなる。

これからの時代、年齢を重ねても学び続ける人が幸せになれる。地域の中で学び、新しい世代を育てる、正に保育サポーターのことである。

地域の中で学びながら、人と人をつなげる立場にある保育サポーターは、地域医療の一翼を担う。

例年、講演後の昼食懇談会は地区別に行っていたが、今回は全体での懇談を試みた。保育サポーターからの多くの質問に講師や専門職の保育サポーターから回答を得た。「サポーターさん、そのままのあなたで良いのですよ。」という山縣先生のメッセージに、参加者皆が癒された。